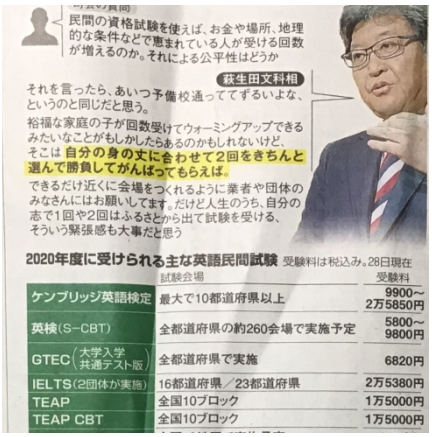
「身の丈に合わせて」


民間の資格試験を使えば、お金や場所、地理的な条件などで恵まれている人が受ける回数が増えるのか。それによる公平性はどうか

萩生田文科相

それを言ったら、あいつ予備校通ってててずるいよな、というのと同じだと思う。
裕福な家庭の子が回数受けてウォーミングアップできるみたいなことがもしかしたらあるのかもしれないけど、そこは自分の身の丈に合わせて2回をきちんと選んで勝負してがんばってもらえば。
できるだけ近くに会場をつくれるように業者や団体のみなさんにはお願いしてます。だけど人生のうち、自分の志で1回や2回はふるさとから出て試験を受ける、そういう緊張感も大事だと思う

2020年度に受けられる主な英語民間試験 受験料は税込み。28日現在

	試験会場	受験料
ケンブリッジ英語検定	最大で10都道府県以上	9900～2万5850円
英検(S-CBT)	全都道府県の約260会場で実施予定	5800～9800円
GTEC(大学入学共通テスト版)	全都道府県で実施	6820円
IELTS(2団体が実施)	16都道府県／23都道府県	2万5380円
TEAP	全国10ブロック	1万5000円
TEAP CBT	全国10ブロック	1万5000円

写真は朝日新聞 10 月 29 日朝刊社会面。萩生田文科相の「格差容認」発言に怒りの声。氏岡真弓・編集委員の視点から―問題は「説明不足」だったことではない。まず、大臣が「身の丈に合わせて」と格差を容認する言葉を口にしたことだ。教育基本法をふまえ、地域・経済格差が教育格差につながるのを防ぐのが大臣の責務だ。課題を受験生に押し付け、開き直ったとも受け取れる。こんな姿勢では、教育政策を預かる資格はない。さらに深刻なのは、制度自体が「身の丈入試」であることを拭えない点だ。民間試験を使う以上、都会の裕福な家の子が何回も受験の練習をするのを妨げられない。萩生田氏の発言は、この問題を改めてあぶり出した。その犠牲になるのは受験生だ。

同紙 30 日の天声人語でも取りあげているので紹介したい。

「新しい制度に不安」「増える金銭負担」。全国高校新聞コンクールで入賞した北海道帯広柏葉高校の昨年 7 月の号から拾った言葉である。大学入試に英語の民間試験を使うことに各地の高校生が悩んでいる▼志望先の大学・学部によって判定に使われる試験がばらばら。会場は都市圏に集中し、地方の受験生は交通費や宿泊費がかさむ。受験料 2 万 5 千円超の試験もある。早い時期から回数をこなせば得点を伸ばしやすい。経済・地域格差を生むと懸念されるゆえんだ▼全国 5200 校の高校長が参加する協会からも、延期を求める声が上がった。「生徒は不安を募らせている」「校長も説明に苦慮している」。文部科学省に出された要望書には切実な言葉が並ぶ▼そんな中、飛び出したのが萩生田光一文科相の「身の丈」発言である、格差への懸念に答えて、「自分の身の丈に合わせて頑張ってもらえば」。さすがに謝罪し、きのう撤回に追い込まれた▼発言を映像で見直してみる。「自分の志で 1 回や 2 回ふるさとから出て試験を受ける、そういう緊張感も大事だと思う」。腕組みをし、ピントの外れた「志」を語る。全国の受験生と先生方の悩みが理解できていないようだ▼先月、東京・霞が関の文科省の前で高校 2 年生がマイクを握った。「初年度の受験生はなぜ声をあげなかったんだと、いまの高 1 や中 3、中 2 に言われたくありません」。就任直後の萩生田大臣が耳を傾けていれば、これほど深刻な失言はなかっただろう。

高まる批判の声に発言を撤回したというが、それで済む話ではない。萩生田氏は加計学園疑惑でもキーパーソンの一人だった。安倍首相の側近中の側近である。安倍首相の責任も問われる。それと「英語民間試験」の拙速な導入は延期すべきである。

（2019 年 11 月 1 日）